

緊急血栓回収術施行による頸部損傷のために内頸動脈閉塞術を要した症例

植杉 剛¹⁾ 富尾 亮介²⁾ 赤路 和則²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳卒中部門

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経外科

急性期脳梗塞に対する緊急血栓回収療法は確立された治療法となったが、時に重大な合併症を併発することがある。当院で経験した症例をご提示する。

81歳 女性。ADL 自立、認知症なし。

○年○日、全失語、重度右片麻痺で当院に救急搬送された。前日までは普段と著変ない状態であった。頭部 MRI 上、DWI で左中大脳動脈領域の一部に高信号を認め、MRA 上では左内頸動脈の描出がなかった。FLAIR では DWI 上の高信号領域は intact であり、rt-PA 静注療法後に、緊急血栓回収術を施行した。combined technique を用いて、再開通を得たが、病棟に入室後、左頸部の腫脹に気づいた。緊急の頸動脈エコーでは、左内頸動脈起始部のやや遠位で血液漏出と瘤形成を認めたため、母血管閉塞も視野に入れて、カテーテル検査による血管評価を行った結果、左内頸動脈起始部のやや遠位で大きな瘤形成がみられ、extravasation を認めた。頸部血管損傷による仮性動脈瘤であり、コイルと液体塞栓物質にて内頸動脈閉塞術を施行し、extravasation の消失を確認することができた。